

ディズニー映画における悪役(ヴィランズ)の変化に関する分析

嶋村 友希

2023年10月16日にウォルト・ディズニー・カンパニーは100周年を迎えた。2020年に行われたWeb調査によると、調査に回答した日本全国の15歳～59歳の男女5252人の9割が、ウォルト・ディズニー・アニメーション・スタジオが制作した映画を一度は見たことあると回答しており、今日の日本においてディズニー長編映画は当たり前の存在になった。

本研究では、ディズニー映画に登場する悪役(ヴィランズ)の発言や行動が、時代が進むにつれてどのような変化があるのかを定性的に明らかにすることを目的にする。

本研究では日本語吹き替え版を研究対象とし、5作品(美女と野獣、アラジン、ふしぎの国のアリス、ライオンキング、眠れる森の美女)のオリジナル版(アニメ版)とリメイク版(実写版)を研究対象として選定する。

研究手法として、行動変化と発言変化の2つの軸から分析を行う。行動変化を分析する上で必要となる情報として、ヴィランズが他者に対して行う攻撃シーン、ヴィランズから他者に対して行う援助行動のシーンと定め、分析する。発言変化を分析する上で必要となる情報として、ヴィランズが作中で喋る暴力的発言、ヴィランズから他者に対して行う援助発言と定め、分析する。

分析の結果、全ての作品において、オリジナル版をリメイクした実写版の方が行動面と発言面、どちらにおいても暴力的な部分が減少しているという結果に至った。特に美女と野獣の変化は大きく、大幅なストーリー変更をせずに暴力的コンテンツを減少させているという結果になった。行動変化について、ストーリーを進行する上で必ず必要な場面においては、暴力的表現はいまだに見受けられたが、あまりストーリーに干渉しない部分においては、シーンごとカットするなどの状況がみられた。発言変化について、「殺す」などの直接的な表現が全くなくなるということにはなかったが、減少傾向が見受けられた。また、暴力的表現に直接関係がないところでも、発言の言い方が優しくなるといった状況が見受けられた。

今後の研究の課題として、サンプル数が足りないという点が挙げられる。本研究ではオリジナル版とリメイク版の計10作品で分析したが、リメイクされ劇場公開されたディズニー映画は2023年末時点で16本あり、全て分析を行うことでより明確な結論を見出せると考える。

(指導教員 芳鐘 冬樹)